

## 第二十五話 心の旅路を振り返つて

皆様、この夏から始めてちょうど半年皆様とご一緒に続けてきました幸福探求の思索の旅、『心の花束』のこの時間も、どうやら終着駅に近づいて来たようです。

「しあわせは、いずこにあるのか？」そろそろ、その結論を出さねばならぬ時が、やって来ましたが、それに先立って、きょうは、も一度、私たちの辿りました思索の旅の後を振り返り、最後の仕上げへの心の準備をしたいと思います。

ともすると、生活の情性に押し流されて、あまりにも「考える」ということから遠ざかった毎日の生活であります。しかし、人間はバスカルが申しましたように「考える輩」、生きてこの生命の姿を、ひとり静かに考える時間と勇氣とをもってください、と私は皆様にお願ひしました。

自分をみつめること、その凝視から生まれ出て来るものは、人生の真の姿です。若く、美しく、富み榮え、成功の喜びに酔っている時、「ああ、私はしあわせだ！」と言うことはだれにで

もできるやさしいことですね。けれど、人生はいつもいつまでも、私たちを甘やかしてはくれません。やがて、年老い、若さと共に美しさも消え失せ、浮雲のような人々の賞讃から忘れ去られて、ひとり、近づく死をみつめるときしみと心に迫る思いは「人生は孤独だ」ということです。その上に、働いても働いても楽にならぬ生活の貧しさの重荷、あるいは、自分の責任でもないのに、ふとしたことから、おそらくは戦争の犠牲者としてでしょうか、自分の身体の一部を失った不具の身、または、あれほど、自分のすべてを捧げて愛したのに、その純粋な愛情が無慚に裏切られた、いやしがたい心の痛み……そういう不幸が重なるとき、人生の孤独はさらにいっそう耐えがたいものになるでしょうね。けれども、「人生とは、そういうものなのだ。生きることは淋しいことなのだ。」と、あきらめてはいけません、と私は申しました。生きていくこのいのち、二度とやり直しのきかぬこの生命です。私が存在しているというこの事実が、無意味なもの、淋しいものであるわけがない。たとえ生きている姿がどんなにみじめであろうとも、私が、私という全人格をもって、存在しているという厳然たるこの事実が、生きるに値するだけの価値をもっているではないでしょうか？ たとえ、貧しさに打ちひしがれて生きようとも、病床に横たわったままの生涯であろうとも「ああ、生まれ来てよかった！」という感謝をもって抱きしめたいほどに、この世の生命は生きるに値するいのちではないかと考えましたね。



だが、生きることの価値、それはあくまで、生きることの目的に連なっていることだと申しました。すべて、物事の値打ちというものは、そのものが作られた、その目的にだけかかっているかということによって定まるもの、従って、人間の生命の価値も、私の日々のいのちが、人間存在の目的にだけかかったいのちであつたかによって定まるものと悟り、それでは人間はいいたい、なんのために作られ、なんのために生まれて来たのかを一緒に考えてみましたね。それは、むつかしいことではありませんでした。だれでもが、否応なしに、そこに宿命的に引きずられているもの、すなわち、「しあわせでありたい」ということが、私たちの生まれながらに宿命づけられた悲願なのであり、そして、それが生きているこの生命の目的であることを悟りました。そして、では、そのしあわせとは？ と、しあわせの青い鳥を求めて、私たちの幸福探求の行脚の旅が始まったのでしたね。

人々が「しあわせ」と呼んでいるもの、富、お金の正態を一緒に見つめました。人間としての、ゆとりと、誇りとをもって生きるに足るだけのお金、それは、しあわせへの手段として、なくてはならぬもの、しかし、それ以上のものをむさぼるとき、富は人間を不幸にするだけなのだとわかりました。

次に、人々が、あんなに夢中になつて追いかける名声とか地位とかの、この世の栄光に目をと

めてみましたね。そして、それも、自分の内面にそれだけの価値があつて、いつとはなしに集まる名声ならば、正しく清い生命への報酬として心おきなく受け取れるでしょうが、自分に価値もないのに、ただ術策や金の力で名声や地位や権力を追求することの愚かさを理解しました。

さらに、その次には、金も要らなきや名も要らぬという世界、愛欲の刹那的な悦楽のはかなさにも目を向けてみましたね。そして、この動物的本能が、精神的に高められず、理性の檻を脱出するものだと悟りました。人生は、ちょうど、猛獣を野に放つたような、淫乱と修羅のちまたとなるだけのものだと悟りました。

それらすべては、それを正しく用いるとき、しあわせへの手段として、すばらしいものではあるが、それ自身が人間の生涯をかけて追い求めるしあわせの青い鳥ではないのだと悟ったとき、私たちは思わず口ずさみましたね。

山の彼方の空遠く、幸住むと人の言う

我、友どちとめ行きて涙さしぐみ帰来ぬ。

山の彼方になお遠く、幸住むと人の言う。と、



ではしあわせはいずこにあるのか？ 私たちは幸福探求の道を続けて、今度は、人間自身の本能に目をとめました。そして、レオナルド・ダ・ヴィンチの名画にまつわるエピソードや、人間の芸術という崇高な労作や、または、ドライとウェットなどと呼ばれる生活のあり方などの中に私たちは人間存在の不可解な複雑さを学びましたね。動物のように欲情するかと思うと、人間独特の内面的な美しさに心引かれたり、火のような情しみに燃えて、いがみあうかと思うと、すばらしい芸術作品を残したり、肉体的には富み榮えて絹に包まれ美食に飽いていながら、心の奥底では無気味な空虚感におそわれて、悩み、呻く、複雑怪奇なこの人間という存在です。私たちは、この複雑な正態のなぞを解こうとして、人間の本质をえぐってみました。そして、精神活動と呼ばれる、私たち自身の働きを分析して、私たちはそこに一般の動物とは本質的に異なるもの、ただに進歩のていどの差ではなく、越ゆることのできない溝によって、他の動物からは判然と区別されたところの、人間独自の精神性を見出しました。なぞは解けたのです。私というものが、ただ一つの存在でありながら、その実、やがて土に帰って行く物質としての肉体と、私の一番奥底で時間と空間とを超越し、無限なるものに向かつて、あえぎ続ける靈魂という、全く相反する二つのものから成り立っているという事実が、すべての不可解と見えたなぞを解く鍵であったのです。

からだがどんなに富み榮え、榮耀榮華の限りをつくしてみても、それで満たされるのは人間の持つ動物的な一面だけなのであって、しあわせということが、私たちの全存在が満ち足りる充足の生命をいうのだとすると、しあわせであるために、まず満たされねばならぬものは、人間の最も心の奥底の生命、靈魂の生命でなければならなかったのです。

それでは、私たちの心の生命はなにによって満たされるのでしょうか？ そこで、私たちは人間の持つ二つの精神活動の一つ、知恵、すなわち「知る」という力を考えました。知恵は真理を追求します。ですが、真理とは？ 科学し探求する人間の知恵の前には、それ活動の天地として、それこそ、限らない未知の世界が横たわっています。けれども、なによりも先に全人類が知らねばならぬもの、全人類の知恵が、知らずして求めていて、それをつかまぬ限り、知恵は、いつも渇き、いつも飢え、絶対に満たされることがないという、たった一つの真理を、私たちは野の草花に、秋の虫に、そして、はてしない天空の星々に教えられましたね。それこそ、『神！』という、言葉はただの一語ですが、限らない深さと限りない奥行とをもつ無限なる神秘でありました。天地の森羅万象の中で、ただひとり、人間のみが、有限の世界の神秘の壁を突き破って、無限なるものに連なることができるという、その人間の私たち自身の偉大さに、おののきながら、「ああ、そうだった。神が存在するのだ！」と悟ったとき、私たちは人間靈魂の存在が今更のよ



うに裏書きされるのを感じました。この生命、この生命の中で、動物性としての肉体は進化論という学説が教える通り、下等な生物からだんだんと進化してきたものであるかもしれない。が、その動物性とは全く本質的に異なった人間の靈魂は、神の生命の分け前、すなわち神ご自身の創造の御手になる造化の傑作なのでした。神とは、「大自然」とか「無限なる力」とか「宇宙の大法則」などと呼ばれるような、私たちとはなんの関係もない冷たい存在ではなくて、神は、私たちの創造主、私たちは被造物なのでした。

そして、そう理解したとき、間髪をいれず私たちの頭に浮かんできた次の問題は、創造主なる神は、なんの目的もなしに人間を創造し給うわけがない。人間には神によってもくろまれた終局の目的があるはずだということです。けれども、ここまで辿り着いたとき、実は、私たちの知恵は、その限界に到達したのです。たゞなら人間創造の目的という、神の意中の奥義を、人間自身が人間の力だけで引き出すことはできないからです。

皆様は、ダンテの神曲をお読みになったことがありませんか。あの神曲の天国篇で、天国の栄光の頂を目ざして登り行くダンテを導くのは、高貴な詩人ビルジリウスでした。が、その坂道の途中でビルジリウスの姿は忽然と消え失せます。案内人を見失って途方に暮れるダンテの目

の前に、その時、静かに姿を現わしたのは美しきベアトリチェでした。艶然とはおえんで、ダンテに導きの手を差し伸べる永遠の恋人ベアトリチェ、皆様は、ダンテがこのベアトリチェをもつて何を象徴しようとしたか、おわかりでしょうか？

さて、私たちの幸福探求の旅路も、いよいよ終幕近くになりました。残されたもう一步を、もう一つの階段を、皆様、どうぞ私と一緒に歩んでくださいませ。

では、また皆様と共に過ごす来週のこの時間を心から楽しみながら、今宵はこれでお別れします。皆様、ごきげんよう、さようなら。